The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	宗教者の災害支援 ： 東日本大震災から能登半島地震へ
Author(s)	島薗, 進
Citation	宗教と社会貢献. 2025, 15(2), p. 23-32
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/102817
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

宗教者の災害支援
—東日本大震災から能登半島地震へ—

島薗 進*
SHIMAZONO Susumu

1. 宗教者災害支援連絡会の発足

宗教者災害支援連絡会(宗援連)は 2011 年 4 月 1 日に立ち上がりました。その頃に東北大学を中心に宗教者や医療者、研究者らが連携し、「心の相談室」も設置されています。これは、災害時の支援活動を行うときに、宗教者の役割があるということを示すものでもあります。その場合に、それぞれの宗教グループが単独で活動していると、被災者はもとより行政や主催者に警戒心を持たれてしまうこともあります。そこで、支援活動としての信頼性を持つために横の連携が必要になってきます。この相談室は、火葬場で死者のために祈る、読経するために集まるところから始まりました。

東京では、なかなか現地に行けないため、支援活動に加わっている宗教者の話を聞きながら、支援活動について情報交換が行われるようになりました。これが宗教者災害支援連絡会の始まりです。東京大学の仏教青年会という場所もありまして、ここで会合を開いておりました。さまざまな宗教、宗派の宗教者がかなりの人数の人が集まって、最初の頃は避難者の受け入れの可能性、宗教施設というのはスペースがありますから避難者受け入れに場所とマンパワーを提供できる、という考えです。

東京でもその日のうちに家に帰らない人がたくさん出ました。それを受けて、その後、自治体と宗教団体が協定をするというような動きが進んでいきます。そういう方向へも発展していったわけです。こういう支援活動が行われていくには横の連携が必要ということで、宗教者災害支援連絡会が立ち上がったわけです。少し後の段階では、毎月 11 日の午後 2 時 46 分に「追悼の時」を持つということを呼びかけました。情報交換会やシンポジウムなどの会合を持つときには必ず黙とうから始めております。そのように祈り

* 宗教者災害支援連絡会（宗援連）・代表

の次元を持つ会としてスタートしました。

2. 宗教者の支援の活性化

一つの大きな要素は福島原発事故です。長期避難者が出たということです。原発災害の長期避難者への応援の気持ちを表明するということで、当時「コンポジム」という言葉が使われておりましたが、コンサートとシンポジウムに長期避難者をお招きして、被災者と支援者が交流し、話し合うというふうな会をやったりしました。東京芸大のアンサンブルとかハンガリーの作曲家兼ピアニストが協力して下さるというようなこともありました。

今日も大正大学の高瀬顕功さんが来て下さっていますが、大正大学はいわき市を中心に宗教者と連携しつつ活発に支援活動に取り組んでいました。そして次第に慰問とともに慰霊やグリーフケアの要素が大きくなって来ます。阪神淡路大震災の時に「心のケア」という言葉が広がりましたが、その時はその担い手は精神科医や臨床心理学が主体と考えられていました。宗教者が心のケアに関わるというのはあまり目立たなかった。もちろんあったのですが、ほとんど注目されなかったのです。ところが東日本大震災では宗教者が重要な役割を果たすという方向へ展開していきました。

これは一つには時代の変化ということがあるでしょう。それから被災した地域が、神戸という大都市と、東北の太平洋沿岸地域という地域社会が残っていて、宗教がなお大きな役割を果たしている地域という違いがあったかと思います。ですが、宗教者側がそういう支援活動に次第に慣れて来ていたということもあります。これは阪神淡路大震災以後、大きな災害が次々起こるようになって来たという変化があります。

3. 宗教者の支援の特性

全日本仏教青年会の現地対策本部、これは、伊達市の霊山地区の曹洞宗の寺院にありました。そこに私も何度かうかがって、若い仏教者の方々の活動に参加させてもらったことがございました。この周辺での活動でそういう活動をさせてもらったという例です。仮設住宅で子供の世話をしたりとか、そういうことも宗教者がやる。これは全国のボランティア団体の人たちが行って来たことですが、それに宗教者も加わるということになります。

「プロのボランティア」という言葉もあります。災害支援の経験を重ねてきたボランティア団体の人たちは、支援活動に習熟しておられる。そういう団体がいくつもあるわけですが、宗教者の支援もそれに近づいてくるということになります。天理教の災害救援ひのきしん隊というのは先駆的な例で、被災地では来てくれるのを心待ちにしているというような例もあります。

また、宗教者はそうした本格的な支援活動と素人の支援、というものをつなぐそういう役割も務めることができます。宗教団体は全国各地にあります。いわば全身に神経が行き渡っているように、全国の地域に宗教団体の拠点があって、そこで何が求められているかを伝えてくれるという可能性ももっています。宗教団体は地域に根差した情報源を持ち、それをつないで支援できるという点も、大きな特徴の一つだと思います。

4. 長期にわたる支援のあり方

福島原発災害の被災地域の方々を保養プログラムに招くという支援活動も多くの宗教団体が行なっていました。私も新宗教団体が中心になって、福島県の家族を鎌倉の建長寺に招く保養プログラムに協力しておりました。5年間ぐらい、数十人の家族を招いて、建長寺に泊まって鎌倉で大仏の見学やら海水浴やら流しそうめんやらを楽しむ。座禅も経験するというようなものです。これはいくつかの宗教団体の人が協力して行なって、毎年夏に行なった保養プログラムです。

高野山足湯隊というのもユニークな支援活動を行っていました。真言宗の僧侶の方々が中心になって、避難所や仮設住宅の被災者に足湯の奉仕活動を行うのです。足湯というのは阪神淡路大震災から始まっていまして、大学院生とか若い人が行うのに良いと言われています。足湯はもともと中国にあった慰問と健康法が組み合わさったような活動です。ひざを交えるように近くで接して、手足をマッサージする。その間に話す、そういう場があると何か話がしやすいのです。

学生のように傾聴の訓練も受けておらず、人生経験も乏しい者だけれども、手をもんで足を湯につけてくつろいでもらっている間に、被災者の話が聞ける。これは学生にとっても大変な学びになり、自分自身を変えていく機

会にもなります。この足を洗うというのは、実はキリスト教にもイエス・キリストが人の足を洗うというエピソードがあります。仏教にも仏足石というものがあり、中国には足の裏のツボを大事にする健康法もあります。そういうものを踏まえて、大人の仏教者が足湯活動したグループもあり、地元の人たちにたいへん喜ばれたのです。

5. 行政との協力関係

行政側も宗教者のこうした支援活動を評価して、歓迎するという動きもありました。当時の民主党政権の官房副長官で福山哲郎さんも宗援連の情報交換会に来て下さいました。このときには、東京の大塚にあるモスクのグレイシーさんのお話もうかがいました。地域の住民とも協力しながら、早い時期から炊き出しなどの活動をしていたという方です。このように仏教、神道、新宗教、キリスト教、イスラームというように、幅広い宗教者の支援活動の話をうかがいました。宗教・宗派を超えて支援を行うということを前面に出したのが仙台の心の相談室であり、東京の宗援連でした。

そして、宗援連の編集で『災害支援ハンドブック―宗教者の実践とその協働』（春秋社、2016 年）という本も作りました。災害支援ということが宗教者にとって大事な活動だという認識がこの間に大いに高まったと言えます。それは宗教活動であり、かつ、どういう意味で大切かというと公共空間における活動であり、つまり、その信徒という自分たちの集団の中だけの話ではない。そういう活動が実は宗教者にとって意義深い活動であるという認識が災害支援の中から育ってきたわけです。

6. 歴史的国際的展望の中で捉える

これは日本の近代の宗教史で見ると、明治の終わり頃から、たとえば 1911 年に渡辺海旭によって浄土宗労働共済会という地域福祉活動が起こされます。これが宗教活動の枠を大きく広げる展開でした。しかし、戦争中になりましてこの流れはいったん途切れたというか、宗教団体側に積極的に取り組むという意識が薄れてしまいました。そして福祉国家の時代にはそれほど活性化しなかった。これが阪神淡路大震災以来、活性化してきて、とくに東日本大震災において大いに再活性化したと言えるのです。

社会と宗教の関係の新しい形態、あるいは次元というものを開いていると、こういうふうに言えるかと思います。そしてこれは世界的な問題でもあります。2004 年の末に、東南アジから南アジアにかけて、たいへんな地震、津波の被害が生じました。インドネシアのスマトラ島沖が震源でしたが、各地に多くの津波被害が及び、死者は数十万人と言われています。2010 年にはカリブ海のハイチで大きな地震があり数十万人の死者が出ました。気候変動による水害や火災などの災害も世界各地で起こっています。

そういう中で、国際的な災害支援の相互協力も課題になって来ています。災害支援の重要性の認識が高まり、2015 年の 3 月には、国連防災会議が仙台で開かれました。世界の宗教者が参加されてシンポジウムが開かれました。この時、津波の被災地で諸宗教がともに祈る機会が設けられました。仙台の日和山にできた慰霊施設で、異なる宗教の人たちがともに祈ったのです。いろんな宗教関係の人が、立場を超えて連携するということが行われるようになったということです、

大阪大学の稲場圭信先生が中心になって、「防災と宗教」クレド（行動指針）というものも作られました。防災と災害支援の重要性をともに認識し、周知をしていき災害が起こったときはすぐに支援活動、さらにはコミュニティーの再生というところにつなげられるようにという考え方を共有していくということです。

7. 能登半島地震の支援活動

さて、ここからは 2024 年元旦の能登半島地震についての話です。私は 10 歳から 18 歳まで石川県で育ちました。そのため、あの地震がありまして、これは大変だと思いました。でも自分に何ができるかというと、難しいところもありました。どういう活動が行われているのかを見に、これまでに 7 回ぐらい行ってまいりました。

秋田県の曹洞宗の高柳さんが、全国曹洞宗青年会で支援活動に長期にわたって取り組んでおられますので、そのお話がうかがえるのはありがたいことです。私は一部を拝見した程度です。しかし、それだけでも、実に多彩な支援活動が行われており、その中で宗教者の支援というのはどういう位置を占めるかということについて考えてきました。宗援連としては情報交

換会をすでに４回開いております。それからシンポジウムを 1 回行っております。そのシンポジウムの時は文化庁の宗務課の課長さんにも来ていただきました。国会議員の人も見に来たりしていました。

8. 支援の遅れとその要因

充実した活動ということでは、曹洞宗の僧侶でシャンティ国際ボランティア会という団体（元は曹洞宗ボランティア会という名だった時もあります）の中井さんは、ほとんど輪島市門前町に住みついて支援活動を続けておられます。住み着いているといっても建物の中にテントがあって、そこに暮らしていらっしゃいますが、そういう方に詳しくお話いただきました。カトリックの教会にはカリタスという支援団体があります。七尾と輪島にあって、金沢の教会から支援の方々が来られて活動を続けておられます。

能登半島地震の被害はそれだけではなく、さらに 9 月 21 日の大水害がありました。輪島市の町野の山にある岩倉寺は古代からある由緒あるお寺ですが、9 月の水害で完全に流されてしまいました。お母さんが壊れた建物に埋もれてしまい、一日以上待って助けられたということです。お寺はもう完全に使えなくなりました。ご住職が輪島市の市議会議員でもあるのですが、こういう方のお話を聞いたりいたしました。

門前町の總持寺祖院は 2007 年の地震で壊滅的な被害を受けて、10 年以上かかって再建されました。そして、ようやく復興の工事が終わり、記念の行事を終えた途端に新たな地震の被害を受けたのです。もちろん、ある程度補強してあり、大丈夫なところもありました。ここが高柳さんたちの全国曹洞宗青年会やシャンティの拠点ともなりました。

能登半島地震の特徴は、支援がたいへん遅れ、時間がかかっているということです。これは半島で交通が不便で、また過疎化が進んでいるという事情もあります。多くの住民が金沢市などに避難して、残っている住民がいない、あるいは少ないという事態で、公費解体もなかなか進まなかったのです。珠洲市や能登町の神社もいくつか見てまいりましたが、長く鳥居や社殿が壊れたままという状態でした。珠洲市宝立に延喜式の式内社の加志波良比古神社がありますが、四月末でまったく壊れたままです。地域住民の多くが地元にいなかったです。

9. 地域住民との協働による支援

宗教者による支援の状況ですが、門前町の浦上公民館は近くに仮設住宅ができています。そこに長期にわたって通っている金光教の大阪の災害救援隊の方々です。長期にわたって炊き出し活動を続けておられ、それが慰問になって、被災者の方々との交わりが続いています。その料理がたいへんおいしいのです。多彩なメニューをお弁当にして配り、その時間を人々の交流の機会としています。つまり、炊き出しをすることの意味は、人々の交流の場を作るという意味が大きい。床屋さんもこのボランティアに加わって公民館で散髪の支援をしていました。お祭りの手伝いをしたり、浦上地域の長期の復興支援に関わって、いわば地域の仲間として活動を続けているわけです。

別の例ですが、珠洲市の天理教寶立分教会と天理教北乃洲分教会が珠洲ひのきしんセンターを災害直後に立ち上げ、独自のボランティアセンターのように機能したという例です。「ひのきしん」というのは「日の寄進」というところから来ていまして、天理教で奉仕活動を指す言葉です。各県に災害救援ひのきしん隊（災救隊）があり、災害があると真っ先に駆けつける支援組織として全国の行政組織にも支援団体にも名が知られています。ところが、この珠洲ひのきしんセンターは災救隊とは別に新たに立ち上がったものです。もちろん珠洲市役所や珠洲の社会福祉協議会とも連携をとり、天理教の災害救援ひのきしん隊とも連携をとりつつでですが、地元の宗教者が地元の状況をリアルタイムで知らせ、宿泊できる場所は教会や空き家を使って、ボランティアを募集したのです。

10. 珠洲ひのきしんセンター

そこに集まったボランティアの方々は全国の天理教の関係者が多いですが、それだけではない。一般の方々も万を超える方々が、行政組織が準備したボランティアセンターではなくて、この珠洲ひのきしんセンターを通して支援活動を行なったのです。天理教は関東大震災や伊勢湾台風など、長い災害支援の活動の歴史があります。その蓄積があって、今回、道路が整っていないとか、水道がなかなか復旧しないとか、宿泊施設がないということで、行政がボランティアを抑制したところがあるわけですが、たいへん有効な

支援活動を展開したのです。

もちろん行政の方はがんばっているのですが、地元の行政の方々は自らも被災者です。一方、石川県庁は能登から遠いこともあって、情報が入ってこない。被災地に出かけるということも不十分だった。これは能登の多く方々の実感でもあります。私が珠洲ひのきしんセンターのオフィス、つまりは天理教寶立分教会のダイニングキッチンでお話をうかがったのは 8 月でしたが、山口県からで水道工事の若い職人さんが来ていて、もう 2 週間も滞在して住民支援を行なっているとのことでした。水道工事を行政がやっても、それを一軒一軒の家で整えていくには、さらに職人さんがいる。ところが地元の職人さんではとても間に合わない。部品も金沢まで買いに行かなくてはならない。だからなかなか進んでいなかったのです。この職人さんは天理教の信徒ではないそうです。

天理教の教会長さんが地元の方々とのネットワークでどこにどういう支援が必要かの情報を集め、ホームページや LINE で知らせる。これに応じて、全国から支援にやって来る。布団を運んだり、寝袋を持ってきたりする訳です。こうした草の根的で手作りの支援が大きな意味を持っており、宗教者がそれを支えたのです。これは今回の能登の支援で目立った特徴の一つじゃないかなと思います。

11. 輪島の重蔵神社

輪島市の市街地の重蔵神社、ここも支援活動でたいへん大きな働きを果たしてきています。市街地と言っていい場所ですね、そこにある由緒ある大きな神社です。ここは社殿も壊れ、境内のいくつかの建物はほぼ使えません。広い境内ですが、そこにテントが張られ、支援活動の拠点となりました。支援物資を置いておくテントがいくつも置かれました。そこに全国の支援団体が拠点を置いて支援活動を続けてきています。「コミサポひろしま」とか「フェニックス救援隊」とか「ピーク・エイド」とか、あるいは金沢大学のグループとかです。

神社の禰宜の能門亜由子さんがコーディネータ的な役割を果たして来られました。ご神体は現在、金沢の石浦神社に安置されている状況ですが、キリコの行列が出るお祭りは金沢と輪島の両方で行ったということでした。

今後、能登の復興に置いてお祭りは重要な役割を果たすことと思います。能登はたいへんお祭りが盛んな地域なのです。お祭りには外に出て行った人たちが帰ってきます。さらに外部から観光客なども多数訪れます。人口減少が続く能登ですが、今後は関係人口に期待するところが大きいです。それがUターン、Iターンにもつながる。そういう可能性を見据えて、地域復興を目指している比較的高齢の方々からのお話もうかがいました。

12. 傾聴活動と今後の支援活動

慰問活動、寄り添い活動、傾聴活動は能登の場合、始まりが遅かったです。それぐらい被害がひどかった。また、被災住民が流出して、なかなか戻って来れず、支援活動も遅れたということです。そこで、東日本大震災の宗教者の支援活動で大きな役割を果たした傾聴カフェが活性化してくるのも 2024年の秋以後でした。東日本大震災のときに、宮城県栗原市の曹洞宗、金田諦応住職が始められたカフェデモンクに倣うような形で臨床宗教師会の方々による傾聴カフェが開かれています。

穴水町の仮設住宅では、地元の学校の先生だった北原密蓮さんが、カフェデモンクを開いています。北原さんは真言宗の僧侶ですが、女性のネットワークが活躍しています。子どもの学習支援もしていて、被災者がゆっくりとリラックスしつつ触れ合える場作りをしています。志賀町でも地元在住の臨床宗教師の方と協力しながら、中部臨床宗教師会の活動が行われています。穴水と志賀町が拠点となって行われていますが、これはその地域に臨床宗教師が居住していたということが機縁になっています。土地勘があり、地域でのネットワークがある人がいることがこの種の支援活動にとって重要な要素であることがわかります。

しかし、いったんその地域に通えるようになると事態が違ってきます。足がかりができるということになりましょう。新たなつながりを作り、ネットワークが広がっていくことが助けになります。災害はつながりを危うくするものです。新たな孤立を招くことも多いです。そういう人たちがつながりを強め、新たな地域の日常で支え合いの関係を育てていくことが必要で、宗教者の支援活動はそのための基盤を作る一助となるということでしょう。

以上、私が見てきた東日本大震災と能登半島地震後の宗教者による支援

活動の様子、を振り返ってみました。能登半島の支援活動はまだこれからというところがあります。今後、多くの宗教者の方々が支援活動に関わっていただけることを願っています。そうした支援の活性化のために私も宗援連の活動を続け、また被災地訪問を続けていきたいと思います。